The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	土田麦僊・『愛の書簡』をめぐって〈東洋画の伝統〉と〈近代西洋画の影響〉：『舞妓林泉図』、『大原女』そして『燕子花』にみる独自の象徴絵画形成
Author(s)	柏木, 加代子
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3184440
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【19】

氏　　名	柏木　加代子（かしわぎ　かよこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　15879　号
学位授与年月日	平成13年2月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	土田麦僊・『愛の書簡』をめぐって〈東洋画の伝統〉と〈近代西洋画の影響〉 —『舞妓林泉図』、『大原女』そして『燕子花』にみる独自の象徴絵画形成—
論文審査委員	（主査） 教授　内藤　高 （副査） 教授　奥平　俊六　　助教授　圀府寺　司

論文内容の要旨

本論文は、近代京都画壇の日本画家土田麦僊のヨーロッパ滞在（1921年11月－1923年3月）に関して、とりわけ麦僊が滞在中に知り合ったフランス人女性アンリエット・コルディエの麦僊宛の書簡を手がかりとして、滞欧生活が麦僊の芸術に与えた意味について考察した論文である。論文は全体としてA4判158頁（資料を含む）からなり、序章、本論四章、及び資料から構成されている。

序章において、麦僊の画家としての出発及び活動の時期が、主に竹内栖鳳との関連の上で定位されたのち、第一章「近代日本画の黎明期」では、竹内栖鳳の革新的な思想を受け継いだ麦僊の、文展時代から国展時代にかけての創作について検討され、渡欧前に麦僊が形成していた絵画観について考察されている。

第二章「麦僊とパリ」は本論文の中心をなす章であるが、ここでは主にアンリエットとの関係から麦僊のフランス滞在に新しい照明があてられている。麦僊がパリ近郊のヴェトイユに住むアンリエット（1907年2月生）と知り合った経緯、彼の作品『パリの少女』成立時期についての推察、ヴェトイユの地についての紹介、アンリエットからの書簡の日本語訳の提示（仏文原文は巻末に記載）、さらに麦僊のアンリエットに対する書簡の下書きや吹田草牧の証言などの検討を通して麦僊のフランス滞在中の行動、思想が考察されている。

第三章「パリの余韻」においては、麦僊の帰国後の制作における西欧体験の反映、とりわけアンリエットとの恋愛体験の作品への影響が論じられている。『舞妓林泉図』、『燕子花』などに構図や色彩の点で西洋近代絵画の影響が顕著に現れると同時に、舞妓像というテーマの中にアンリエットの記憶が強く反映されているということを、柏木氏は強調している。

第四章「杏村と麦僊」では、麦僊の弟土田杏村の『象徴の哲学』及び『恋愛論』との関連のもとに、杏村からの影響の可能性も含め、麦僊芸術の思想的側面、とりわけ、芸術創造における恋愛の持つ重要性の認識について検討されている。

最後に結論の章として、これまで述べられてきた諸問題が再整理されている。

本文ののち、資料として土田麦僊の略年譜、土田麦僊の渡欧日誌、土田杏村の略年譜、アンリエットからの書簡原稿（仏語オリジナル、一部家族からのものも含む）、ヴェトイユの地図、ヴェトイユ近郊の写真、アンリエット・コルディエの写真などが提示されている。

論文審査の結果の要旨

本論文の優れた価値は、まず、土田麦僊の画業を考える上で極めて貴重な資料となると思われる、アンリエット・コルディエからの書簡を整理し、整然とした形で提示したことである。吹田家に保管されていた書簡をそのフランス語の原文を活字化し、さらに、その翻訳を示したことによって、他の研究者にとってこうした資料が接近可能となったことは重要な意義を持つ。とりわけ、その書簡が誤字や文法的誤りを含む、解読の難しい書簡であったことを考えると、その努力に敬意を払いたい。また、アンリエットとの出会いの経緯を詳細に辿ることにより、『パリの少女』などの作品の成立時期に関して新しい可能性を示したことをはじめとして、麦僊の滞欧生活に関して、多くの新しい側面が見えてきたことも重要である。さらに、麦僊とアンリエットの出会いの場であったヴェトイユを実際に調査して、またアンリエットの家族ともコンタクトを持ち、麦僊の滞欧生活の環境についてのいくつかの具体的な資料を提示していることも貴重である。

しかし、本論文には今述べたような重要な価値と同時に、論文としての不十分さが存在することも否定できない。個々の作品の分析においては、分析が性急で、作品自体に沿って充分に検証することが行われていないケースがよく見られる。とりわけ、第三章の『舞妓林泉図』の分析において、柏木氏は麦僊におけるアンリエットの記憶を強調するあまり、他の可能性の検討が見失われている。また、全体として、分析の枠組みなどが不確かで、充分に説得力のある論の展開がなされていない。芸術創造と恋愛の問題も、観点を明確化して既に知られている書簡など、他の資料も充分に活用して丁寧に分析すれば、さらに内容の充実した論が展開できたことと思う。また、「近代化」など、論の基本をなす語の定義をさらに示す必要があったと思う。

こうした欠点は存在するにしても、既述のようにアンリエット書簡の資料としての価値を充分に認識し、それをまとまった形で提示したことの重要性は、麦僊の滞欧期についての研究の可能性を大きく増大させる点において、美術研究史上きわめて重要な意味を持つと考えられる。今後検討される価値のある、多くの示唆を含んだ論文である。以上の点を考えて、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。